

《論説・動向》

貨幣からアカイア連邦を再考する ——ヘレニズム時代の経済・貨幣史のための予備的考察——

岸本 廣大

はじめに

本稿では、ヘレニズム時代のアカイア連邦の貨幣に関する研究動向を概観し、今後の研究の方向性や課題を、予備的な考察とともに示すこととする。過去の貨幣の研究は、一般的に「古銭学(Numismatics)」に属し、貨幣それ自体の規格や図像、成分分析などが中心に行われている。一方で、古銭の収集に主たる関心を置く「趣味」という印象を持たれることもあり、歴史学研究との距離が感じられるかもしれない。しかし、その成果は歴史学にも活用され、日本では、日本史や東洋史、また西洋史でも特に中世史などでは貨幣を活用した研究成果がみられる¹。一方、西洋古代史の分野では、資料たる硬貨に触れる機会が少ないこともあってか、貨幣を用いた研究は盛んとは言えない²。

しかし欧米においては、貨幣の分析やこれまでのデータの再検討、そしてそれらを用いた歴史学的考察が、西洋古代史の分野でも活発に行われている。本稿が対象とするアカイア連邦もその一例であり、本稿の意義は、それをあまり馴染みのない日本の学界に紹介することにある。それに加えて、貨幣は古代ギリシア世界を理解するために重要な視角になりうる。数多くのポリスや王国、連邦がそれぞれに貨幣を発行した結果、ギリシア世界には複数の「地域通貨」がモザイク状に並存していた。その中には、地域を越えて通用する「国際通貨」もあり、これらの貨幣の流通や関係、役割、そして歴史的な変化を論じることは、ギリシア世界の総体的な理解につながると考えられる。その可能性を、本稿では示してみたい。

1. ヘレニズム時代の貨幣史の概観

最初に、ヘレニズム時代の貨幣について概説する。ヘレニズム時代の幕開けにつながるアレクサンドロス大王の東方遠征は、政治史だけではなく、貨幣史においても大きな転換点と

¹ 櫻木晋一『貨幣考古学序説』慶應義塾大学出版会、2009年。櫻木は、考古学(歴史学)的な性格を強調し、「貨幣考古学」という学問分野を提唱している。岩橋勝(編)『貨幣の統合と多様性のダイナミズム』晃洋書房、2021年。「特集 中世貨幣の世界」『西洋中世研究』第13号、2021年、2-78頁。

² 近年の日本で、貨幣を正面から扱った西洋古代史の成果としては、比佐篤『貨幣が語るローマ帝国史——権力と図像の千年』中央公論新社、2018年がある。ギリシア史については概説書の一部だが、師尾晶子「アテナイ——民主主義、文化・芸術の都」長谷川岳男(編)『はじめて学ぶ西洋古代史』ミネルヴァ書房、43-61頁(特に50-51頁)がアテナイの貨幣に触れる。それ以外に、部分的にでも貨幣、特に図像に注目した研究として、田中創『ローマ史再考——なぜ「首都」コンスタンティノープルが生まれたのか』NHK出版、2020年や、増永理考『ローマ帝国を生きるギリシア都市——小アジアにおける文化・経済のダイナミクス』京都大学学術出版会、2024年もある。

なった。この遠征の結果、莫大な金銀を手に入れたアレクサンドロス、それらを用いて兵士に支払う高品質の金貨・銀貨を大量に発行した。特に銀貨は、重量や規格の点で、それ以前のギリシア世界において「国際通貨」として流通していたアテナイの4ドラクマ貨(1ドラクマは約4.3g)を模し、その品質の高さもあって、ギリシア世界に広く流通することになった。これらの硬貨にはアレクサンドロスの横顔(表面)とゼウス(裏面)が打刻されており、「アレク



図1：アレクサンドロス貨(4ドラクマ貨)

出典：P. Thonemann [2015] p.15, Fig. 1.13.

サンドロス貨(“Alexander”, Alexander-style)」ともよばれる(図1)³。アレクサンドロス貨は主として傭兵の給与の支払いに充てられたと考えられている。大王の死後、大量の傭兵を用いたヘレニズム諸王国や一部のギリシア人ポリスにおいても、アレクサンドロス貨を模し、アッティカの重量基準や規格に従った貨幣が発行された⁴。前3世紀には、高品質の代名詞となったアレクサンドロス貨が、ギリシア世界における新たな国際通貨となったのである。

一方、アッティカ基準とは異なる重量基準や、独自の図像をもった硬貨も、古典期から引き続き各地で発行され続けた。それらは発行主体(ポリスや王国)のアイデンティティを喧伝する象徴的な目的があったとされるが、両替手数料を徴収したり、実際の金属含有量よりも額面を高くすることで、貨幣(すなわち貴金属)の域外への流出を防ぐという実質的な目的も指摘されている⁵。このような地域通貨と、国際通貨たるアレクサンドロス貨とが並存していたのが、前3世紀、つまりヘレニズム時代前半の貨幣状況である。

しかし前2世紀に入ると、アレクサンドロス貨の流通が減少し、前2世紀半ばには新たな発行がみられなくなった。それに代わる新たな国際通貨の設定が試みられることもあった。例えば、アテナイでは「新様式(New style)」と呼ばれる「冠柄(stephanephoroi)」銀貨が発行された(図2)。これは従来のアッティカ基準、すなわちアレクサンドロス貨よりもやや軽量に造られており(1ドラクマが約4.2g)、一説には、長年の使用で摩耗したアレクサンドロス貨との交換を想定していたともされる⁶。しかし、アレクサンドロス貨に代わる新たな国際通貨は結局誕生せず、ヘレニズム時



図2：アテナイの「冠柄」銀貨

出典：P. Thonemann [2015] p.57, Fig. 3.17.

³ P. Thonemann [2015] *The Hellenistic World: Using coins as Sources*, Cambridge, pp.13-16.

⁴ 死後にアレクサンドロス貨を模して発行されたものは「後アレクサンドロス貨(posthumous Alexander)」, アレクサンドロス貨を模してポリスで発行されたものは「都市アレクサンドロス貨(civic Alexander)」と呼ばれることがある。

⁵ Thonemann [2015] p.119.

⁶ *Ibid.* pp.56-61, 124-126.

代後半には、多数の地域通貨が並立する状況となっていた。この状況はローマの支配下でも継続することになる。

以上は主に銀貨の話だが、古代ギリシア世界では青銅製の貨幣、いわゆる青銅貨も存在した。含まれる金属としての価値が額面よりも低い青銅貨は、額面上の価値を発行主体(ポリスや王国)が保証して初めて価値をもつ一種の信用貨幣だが、その流通範囲は発行したポリスやその近隣に限られた。青銅貨はギリシア世界では前4世紀半ばまでに普及し、次第に小額の銀貨に取って代わり、日常的な取引で使用されたと考えられている⁷。

2. アカイア連邦の貨幣史概観

ヘレニズム時代にギリシア本土の一大勢力となったアカイア連邦でも、様々な貨幣が発行された。まず、加盟ポリスの間で共通した特徴がみられる貨幣(本稿では「連邦貨幣」と呼ぶ)に注目したい。

アカイア連邦が成立したペロポネソス半島北部のアカイア地方では、当初はアイギナやペロポネソス半島の他の地域で発行された貨幣を流用していたようである⁸。しかし、前4世紀初めに連邦が成立すると、共通の重量基準と規格を有した連邦貨幣が発行されるようになった。連邦貨幣は銀貨で、アッティカとは異なるアイギナの重量基準(1ドラクマが約6.2g)に従って2ドラクマ貨、1ドラクマ貨、3オボロス貨(=0.5ドラクマ貨)が発行された(図3)。表面には女神(アカイアの擬人化とされる)の横顔が共通して施され、裏



図3：初期のアカイア連邦の連邦貨幣

左から2ドラクマ貨、1ドラクマ貨、

3オボロス貨 出典：Warren [2007] Plate 1.

面にはゼウスの座像(2ドラクマ貨)や武装したアテナ(1ドラクマ貨と3オボロス貨)が、「ΑΧΑΙΩΝ(アカイア[連邦])」の銘とともに打刻されている。これらは、当時の連邦の勢力範囲であるアカイア地方のみで流通していたと考えられている。同時に、連邦の加盟ポリスも独自の貨幣を発行していた。本稿ではこれを「都市貨幣」と呼び、「連邦貨幣」と区別する。この都市貨幣もアイギナ基準であったが、連邦貨幣よりも小額の銀貨と青銅貨が主で、表面にはローカルな神の頭部が、裏面には月桂冠とそれに囲まれた発行ポリスの頭文字や神の図像が施されていて、連邦貨幣と区別されていた⁹。

アカイア連邦は、マケドニアの台頭によって前4世紀後半にはいったん解体されるが、前281/0年に再結成されると、連邦貨幣も再び発行されるようになった。再建後の連邦貨幣は

⁷ Ibid., pp.128-130, 133-135.

⁸ E. Mackil [2013] *Creating a Common Polity: Religion, Economy, and Politics in the Making of the Greek Koinon*, Berkeley, p.252.

⁹ Ibid., p.251.

大きく「旧貨幣」と「新貨幣」に分けられる。旧貨幣は前3世紀に発行され、当初はアイギナ基準だったが、のちにそれよりも軽い、いわゆる「軽アイギナ基準(reduced Aeginetan weight-standard)」(1ドラクマが約5g)へと移行していった¹⁰。図像は、表面にゼウスの横顔、裏面には解体以前の都市貨幣にみられた月桂冠、および「アカイア」の頭文字である「A」と「X」が組み合わされたモノグラムが



図4：アカイア連邦の「旧貨幣」(3オボロス貨)

出典：Grandjean [2019] p.200.

刻まれた(図4)。しかし旧貨幣の流通は、解体以前の前4世紀の連邦貨幣同様にアカイア地方に限られ、前3世紀に新たに加盟したアルカディア地方やアルゴリス地方の諸ポリスでは、重量基準の異なるアレクサンドロス貨に準じた都市貨幣が発行され続け、主に流通した。しかし前2世紀にはいると、それらの都市貨幣の流通地域にも、軽アイギナ基準の連邦貨幣、すなわち新貨幣が広がるようになる。新貨幣の図像は旧貨幣を引き継いでいるが、主に3オボロス貨を中心に発行され、発行時期によってさらに3つに分けられる。まず、主にアンティオコス戦争(前192-188)中に発行された「前期」、次に第三次マケドニア戦争(前167-前164)中に多く発行された「後期」である。最後の「末期」の貨幣の発行時期については議論があるが、近年は前1世紀のミトリダテス戦争から内乱の時期に同定されている¹¹。

さらに、アカイア連邦では連邦主導で発行されたと考えられる青銅貨も確認できる。この青銅貨の表面にはゼウス、裏面には擬人化された女神アカイアの座像が施され、発行ポリスとアカイア連邦の名前(エスニコン)が刻まれている(図5)。興味深いのは、これらが恒常的ではなく、おそらく第三次マケドニア戦争直後に、単発的にかつ大量に発行されたと考えられていることである。この青銅貨を発行した加盟ポリスは45(ないし47)を数え、当時の加盟ポリス(約70)の6割を超える。そのなかにはこれまで貨幣を発行したことがない共同体も含まれている¹²。この青銅貨は主に発行



図5：アカイア連邦の青銅貨(パガイ発行)

出典：Grandjean [2019] p.201.

¹⁰ C. Grandjean [2019] Internal Mechanisms, External Relationships of the Achaians: A Numismatic Approach, in H. Beck, K. Buraselis and A. McAuley (eds.) [2019] *Ethnos and Koinon: Studies in Ancient Greek Ethnicity and Federalism*, Stuttgart, pp.193-203 (esp. pp.194-195). 軽アイギナ基準は、ボイオティアやデルフォイでも用いられ、「同盟(allied)」基準とも呼ばれた(Thonemann [2015] p.72)。

¹¹ C. Grandjean and M. Belt-Lemarquand [2021] The Hellenistic Achaian Koinon and its Coinage, in: C. Grandjean (ed.) [2021] *The Koina of Southern Greece: Historical and Numismatic Studies in Ancient Greek Federalism*, Bordeaux, pp.63-76 (esp. p.65). 「末期」の発行時期については、前1世紀の他に、アカイア連邦がローマに敗北して一時解体されることになるアカイア戦争(前146年)とする説がある。

¹² J. A. W. Warren [2007] *The Bronze Coinage of the Achaian Koinon: the Currency of Federal Ideal*, London.

ポリスの内部で流通していたと考えられるが、中には発行ポリスを大きく越えて流通したものも確認される¹³。

3. アカイア連邦の貨幣に関する先行研究

古代ギリシアの硬貨は、ルネサンス以降美術品としての価値も評価され、収集の対象となったこともあり、古くから注目を集めてきた。その中でアカイア連邦の貨幣も、まずは伝統的な古銭学の手法で研究された。古くは、Thompson が、1937 年に入手された出土地不明の退蔵貨幣(hoard)677 枚の中に含まれる、429 枚のアカイア連邦の連邦貨幣を分析した¹⁴。その退蔵貨幣には、連邦貨幣以外に 119 枚の加盟ポリスの独自の都市貨幣（前 3-2 世紀）も含まれており、連邦貨幣と都市貨幣の並存が注目された。さらに彼は、1959 年にアイトリア地方のアグリニオンで出土した 1,340 枚の退蔵貨幣を分析し、その中の 834 枚のアカイア連邦貨幣を詳細に研究した¹⁵。これらは先述した新貨幣にあたるもので、硬貨を生産する打ち型(die)に着目した手法によって、先述の新貨幣の 3 つの時期区分がなされた。さらに、Troxell は前 3 世紀の連邦貨幣、すなわち旧貨幣を分析し、その発行目的を連邦の軍事活動に、Chantraine は新貨幣への移行を前 189/8 年のフィロポイメンによる連邦の行政改革に関連づけた¹⁶。1970 年代までには、伝統的な古銭学の成果が歴史学と結びつき、より歴史学的な考察が展開されるようになった。

1990 年代に入ると、連邦研究の隆盛もあって、これまで蓄積された貨幣分析のデータが再検討されることになる。連邦全体を対象にこれまでのデータを再整理した Psoma and Tsangari はその出発点となった研究といえる¹⁷。一方で、Mackil and van Aflen は、「協同貨幣(cooperative coinage)」という概念の下、連邦政府が明確な貨幣政策の下で連邦貨幣や加盟ポリスの都市貨幣の発行や流通量を統制していたと論じるなど、連邦特有の経済政策を明らかにした¹⁸。また、アカイア連邦の青銅貨を生産した打ち型を分析した基礎的研究である Warren を受け、Kroll は青銅貨が発行された背景に、第三次マケドニア戦争での敗北によってマケドニアの銀鉱が閉鎖され、かつ賠償金として大量の銀貨がローマに持ち出されたことで、ギリシア全体で銀不足が生じたことを挙げた。彼は、連邦が加盟ポリスに銀貨を納付させる代わりに、加盟ポリスに青銅貨の発行を許可したと論じる¹⁹。

¹³ 例えば、アルゴス、エリス、メガラ、ペッレネ、フィルース、シキュオン、テゲア。Grandjean and Belt-Lemarquand [2021] p.64.

¹⁴ M. Thompson [1939] A Hoard of Greek Federal Silver, *Hesperia* 8, pp.116-154.

¹⁵ M. Thompson [1968] *The Agrinion Hoard (Numismatic Notes and Monographs 159)*, New York.

¹⁶ H. A. Troxell [1971] The Peloponnesian Alexanders, *ANSMusN* 17, pp.41-94; H. Chantraine [1972] Der Beginn der jüngeren achäischen Bundesprägung, *Chiron* 2, pp.175-190.

¹⁷ S. Psoma and I. Tsangari [2003] Monnaie commune et états fédéraux: la circulation des monnayage frappés par les états fédéraux du monde grec, in: K. Buraselis and K. Zouboulakis [2003] *The Idea of European Community in History, Vol.II: Aspects of Connecting Poleis and Ethnē in Ancient Greece*, Athens, 2003, pp.112-142.

¹⁸ E. Mackil and P. G. van Alfen [2006] "Cooperative Coinage", in: P. G. van Alfen (ed.) *Agoranomia: Studies in Money and Exchange Presented to John H. Kroll*, New York, 2006, pp.201-246.

¹⁹ Warren [2007]; J. H. Kroll [2009] Review of Warren 2007, *JHS* 129, pp.192-193.

以上の流れを受けて、2010 年代以降は、連邦の経済分野に目を向けた研究が増加した。特に、Mackil は、ギリシアの連邦成立の背景の一つに、偏在する資源を確保するための経済協力を挙げ、連邦貨幣もその一環と位置づけて、前 4 世紀を中心にアカイア連邦を取り上げている。また、経済史家の Economou は、経済学の分析手法も用いながら、連邦による貨幣供給の統制など、アカイア連邦の経済政策を高く評価した²⁰。一方で Grandjean らの研究は、アカイア連邦の貨幣そのものを分析対象としており、どちらかという古銭学に近いが、科学的手法なども用いて貨幣を再検討して、新たな見解を提示している²¹。例えば、連邦は連邦貨幣の重量を厳密に統制していた一方で、銀含有量や硬貨の材料となる地金の供給元やその品質のばらつきにはそれほど気を払わず、加盟ポリスに裁量の余地があったことが硬貨の成分分析などを通じて示された。

4. 先行研究の傾向と課題

前章でみたように、連邦研究の隆盛や貨幣データの再整理を受けて、アカイア連邦の貨幣に関する研究は 2010 年代に新たな段階に入り、一定の成果を挙げた。その成果を踏まえて、次なる課題を論じる時期に来ていると思われる。

2010 年代以降の研究は、そのアプローチに一つの共通の特徴が垣間見える。それは、連邦を対象を絞り、連邦の貨幣やそれに関連する史資料の分析から、経済的な政策や活動が連邦の「内部」でどのような役割や意義をもったのか、論じていることである。結果として、経済分野における連邦の権限や加盟ポリスの自立性の程度が最終的な議論の中心となる。また、これらの研究が概してアカイア連邦の貨幣政策を含む、経済政策全般を高く評価していることも、共通する傾向といえる。すなわち、アカイア連邦は、資源・資金の獲得や領域内での交易の円滑化のために、法制度を整えたり、共通の貨幣を導入したり、積極的に関わって、それが一定の成果を収めた、と評価されるのである。古代ギリシアの連邦が、従来まもなくって軍事・政治組織として性格づけられ、なおざりにされてきた経済の実態を明らかにしたことは、重要な研究成果であろう。

その一方で、連邦がなぜ共通の貨幣を発行し、なぜ種々の経済政策をとったのか、その歴史的な背景については、まだ検討の余地が残されているように思われる。その観点から連邦の経済政策を論じるにあたっては、連邦の「外部」との関係を考える必要が出てくる。というのも、連邦の政策的な決定やそれに対する加盟ポリスの対応は必ずしも連邦の中だけで完結するものではないからである。勢力図が時期によって大きく変わるヘレニズム時代において、連邦の政策決定は国際的な情勢とは無関係ではないし、加盟ポリスもまた、そのような国際情勢を見越して連邦と交渉し、時には連邦外のポリスや王国との結びつきを強め

²⁰ Mackil [2013]; E. M. L. Economou [2021] *The Achaean Federation in Ancient Greece: History, Political and Economic Organisation, Warfare, and Strategy*, Cham.

²¹ C. Grandjean (ed.) [2021] *The Koina of Southern Greece: Historical and Numismatic Studies in Ancient Greek Federalism*, Bordeaux.

た。連邦はギリシア世界で孤立した政治共同体ではなく、むしろ密な交渉を基盤とした共同体なのである²²。それゆえ、国境を越えて流通する貨幣に関わる連邦の経済政策もまた、連邦や加盟ポリスの純粋に経済的な判断によってのみ決定、実施されたわけではないだろう。連邦外部から、経済的影響はもちろんのこと、それだけでは合理的に説明できない政治・外交的な影響を、望もうが望むまいが、受けざるを得なかったであろうことは、現在のグローバル社会を生きる我々にとって想像に難くない。そのような外部からの、経済にとどまらない影響を踏まえて、アカイア連邦の貨幣およびそれに関する政策を再検討することは、2010年代以降の研究成果に再考を迫る可能性を秘めている。

5. アカイア連邦の貨幣政策についての予備的考察

前章で提起した、アカイア連邦の経済的側面の再考の一例として、ある事例を簡単に検討してみたい。前 186 年のアカイア連邦の定例議会に、各国から多くの使節が来訪し、同盟や友好関係の更新を求めた。中でも、アッタロス朝ペルガモンの王エウメネス 2 世は同盟更新の後に、120 タラントンの資金(おそらく銀貨)の提供を申し出た。しかし、アカイア連邦の政治家たちは「金額の大きさにいくらか心を惹かれながらも」、その定例議会でエウメネス 2 世からの申し出を断ることを決めた(Polyb. 22.7.3; 22.8.13)。一方、同じ定例議会では、同盟更新に際してプトレマイオス朝から贈られた青銅武具 6,000 着および青銅貨 200 タラントンの、特に異論もなく受け取られている(Polyb. 22.9.3)。この両国に対するアカイア連邦の対応の違いは、どのように考えたらよいのであろうか。

ポリュビオスによれば、アカイア連邦がエウメネス 2 世の申し出を断った理由は、資金の用途にあった。エウメネス 2 世は資金提供に当たって、それを運用した利子を連邦の評議会議員の給与に充てることを提案した。それに対し、アポロニダスなる人物がこれは賄賂に等しいと議会で演説し、それが申し出の拒否につながったという(Polyb. 22.8.1-8)。ポリュビオスはそれ以上の理由は述べていないが、この定例議会の直前、おそらくアンティオコス戦争(前 192-188)およびフィロポイメンの行政改革(前 188)を通じて、アカイア連邦で新貨幣が導入されていたことも考慮すべきであろう。「心を惹かれ」ていたという記述からは、連邦内での銀(貨)の需要が依然として高かったことを示し、それに迅速に応えようとしたエウメネス 2 世の抜け目ない外交手腕を見出すことができるかもしれない。一方で、当時のペルガモンで発行されていた銀貨がアッティカ基準のアレクサンドロス貨であったことを考えると、仮に提供された資金がその銀貨であった場合は、せっかく導入したアカイア連邦の新貨幣(軽アイギナ基準)と競合する貨幣が連邦内に流入することになる。アカイア連邦の政治家たちがこの「競合」をどのように考えていたのか、また資金申し出の拒否にどれだけ関係したのかは、史料上明言することはできないが、新貨幣導入後に、アカイア連邦加盟ポリスの発

²² 岸本廣大 [2021]『古代ギリシアの連邦——ポリスを超えた共同体』京都大学学術出版会。

行する都市貨幣も、連邦貨幣と同じ軽アイギナ基準に移行していったことを踏まえると、異なる重量基準の流入を連邦が嫌った可能性も想定されるであろう。

さらに大きな視点で考えれば、前2世紀はギリシア世界全体で、これまでの国際通貨であったアレクサンドロス貨の流通量の減少が見られた時期でもあった。当のペルガモンも、上述の事例のしばらくのち、前167年頃から独自の重量基準(1ドラクマが約3.05g)に基づくキストフォロイ貨(「籠柄」貨)を発行するようになる²³。このような世界規模での貨幣状況の大きな変化の中に、この事例は位置づけて考察しなければならないだろう。

他方、プトレマイオス朝から受領した青銅貨も、アカイア連邦の貨幣政策との関連を指摘できる。前186年の青銅貨の受領は、当時からアカイア連邦で青銅貨の需要があったことを裏付ける。もし上述のようにアカイア連邦が競合する銀貨の流入を嫌ったのだとしたら、青銅貨にはそのような新貨幣との競合を危惧する必要がなかったことになり²⁴、銀貨と青銅貨に対する連邦の反応の違いを見出すことができる。青銅貨の受領は、経済的な理由、例えば流通貨幣の規格の統一からだけでは説明できない。さらに、この約20年後、アカイア連邦は独自の青銅貨を大規模に発行することになる。先述のように、この青銅貨発行は、第三次マケドニア戦争による銀不足と関連づけられる傾向にあるが、アカイア連邦においては、それに先立つプトレマイオス朝からの青銅貨の流入との関連もまた、考慮すべきかもしれない。

おわりに

前章の一事例だけをみても、アカイア連邦の貨幣・経済政策に対して、アカイア連邦「内部」の政策決定や経済的要因だけでなく、「外部」からの影響および非経済的要因も視野に入れた総合的な考察が可能であり、必要とされていることをうかがい知ることができるだろう。先行研究は、アカイア連邦の経済政策の成功した側面を取り上げてきたが、それがアカイア連邦の当初の目的だったのかは一考の余地があるだろう。むしろ意図せざる結果だった可能性もありうる。さらに、そもそもアカイア連邦の諸政策がどこまで経済的な目的や理由でなされたのか、そうだとした場合でも最初から同じ目的で、外部からの影響による変化はなかったのか、政策の経時的変化も検討の対象となるように思われる。国際情勢に振り回されるアカイア連邦という歴史像は、連邦研究の成果としては残念な結果なのかもしれないが、それは逆に連邦が生き抜いてきたギリシア世界を反映した結果ともいえる。連邦を通じて、ポリスやギリシア世界全体の経済的な情勢を考察することが、今後の課題として浮かび上がってきた。

(同志社大学准教授)

²³ Thonemann [2015] pp.77-81.

²⁴ プトレマイオス朝の発行した青銅貨は、独自の規格を有しており(Thonemann [2015] pp.121-122)、アカイア連邦が受け取ったのも、そのような青銅貨だったとされ、Warren [2007]によれば、プトレマイオス3世の青銅貨がペロポネソス半島各地で見つかっている。